

夜は静かに明け始めていた

一月十七日午前五時。日本海に低気圧が発生、関西上空は薄雲に覆われていた。夜明け前の静寂のなか、眠りから覚めた人々が各地で動きだした。

阪神電鉄の運転士鶴田和宏(二七)は、尼崎発下り始発普通電車を運転して西宮市・香櫨園駅を出たばかり。長男雄大(三)が数日前から風邪気味だった。「勤務を終えたら早く帰ろう」

五時十分、大阪府四条畷市で、日本タ

クシー運転手の浦井浩一(五三)は出張する男性客を乗せた。「大阪空港へ」。まだ、ヘッドライトをつけている。

十七分、神戸市西方を走る山陽電鉄の運転士畠本忠則(四九)は、明石市・東一見駅から車掌の早川邦彦(三三)と特急に乗り込み発車。ダイヤ通りなら、三宮には五十四分に着くはずだ。

十九分、大阪市淀川区のＪＲ西日本宮原電車区から回送電車「スーパー雷鳥一

号」が出る。運転士中島康正(三三)は青信号を確認、鷹取駅に向かった。

二十六分、十四夜の月が満月にかわった。

三十分、西宮市消防局から鳴尾消防署に「乳児が急病」との出動命令が入った。救急隊長の中村真一(三三)は勤務について前日朝から計九回出動、その報告書をまとめていた。「よおー、ついてるなあ」

と苦笑い。隊員二人と救急車に乗り、六百メートル南の公団武庫川団地へ。患者は、けいれんを起こした一歳の女の赤ちゃんだった。阪神高速道路神戸線・芦屋料金所班長の福井幸夫(六三)が、ブースわきの仮眠所で目を覚ました。あくびしながら電気ポットで湯を沸かす。

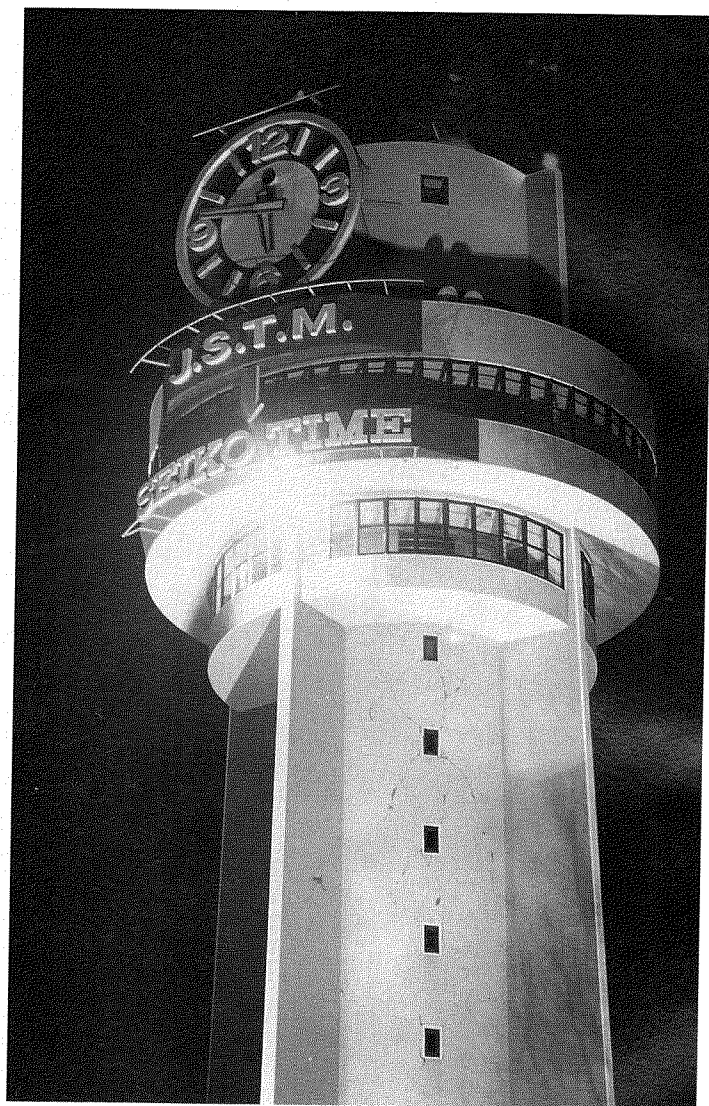
三十五分、料金所下の国道四三号線では六甲アイランドを目指すトラック運転手山本朗(三三)が、神戸市東灘区深江本町を走っていた。トラック仲間と無線で交信、「久しぶりやな。ほかの連中は元気か。こっちは海上コンテナを積んでから、東大阪行きや」。三年前に無線免許を取得して以来、運転中の楽しみになった。

四十分、約十五キロ西の長田区名倉町で、菊水タクシーの運転手奥憲一(四四)は五十代の会社員を乗せた。吐く息が白い。「新神戸駅まで」「寒いですねえ。出張ですか」

貝原俊民知事(六三)専属の秘書課員大西力(五三)は明石市の自宅を目覚めた。三十分早めに登庁、公用車の整備をするつもりだ。

四十二分、帝産観光バスが阪神高速神戸線の武庫川を渡り、西宮市に入った。運転手は京都支店の福本良夫(五三)。前夜、長野県野沢温泉スキー場を出発、四十人の客を京都、梅田で降ろし、神戸市の児童館職員佐々木純子(二九)ら二十代の女性客三人を乗せてＪＲ三ノ宮駅に向かう。

四十三分、ＪＲ東海道、ＪＲ山陽線の



明石市立天文科学館・大時計

1978年10月、2代目として登場、日本の標準時を示す。直径6・2メートル。2月17日正午から正常作動(2月16日撮影)